期待がもてる美野里町統計大会

統計調査の最前線を担う調査員が，意欲に満ちてその職務に精励できる環境づくりに努める――私は，現行の統計調査実施体系の中では，このことこそが，統計行政の末端を預る者の最大の責務と考えている。特に本町のように，専任化もされない，弱い統計機構の中におかれている担当者は，これのみに意を注げば足りると言っても過言ではないだろう。

この観点から，本町ではこれまで調査員の志気を高める方策として，

(1)広報紙による調査員氏名の公表

(2)調査員報酬に対する税金対策

(3)退職者への感謝状及び記念品の贈呈制度の確立

(4)県等主催の研修会及び県統計大会への積極的派遣

(5)調査員の調査票提出時における審査の強化

を，また，調査しやすい環境づくりのための具体策としては，

(1)調査協力依頼のための広報活動の徹底

(2)調査結果の早期公表と調査協力に対する謝意表示

を，行なってきたところである。

しかし，これらの施策は，それ相当の成果をあげたものの単発的であるため，相乗効果を生むことまでには至らず，期待した統計の総体的な水準の向上には及ばなかった。このことは，町における望ましい統計体制確立のためには，総合的な施策が必要なことを示唆しているものとこの検討に入ったが，結果は統計大会の開催をおいて他にないという結論となった。

これにより諸準備を進め，去る２月24日県の大会のスタイルをまねて，第１回美野里町統計大会を開催したが，統計関係者64名（出席率86％）の他，町長，県議会議員，町議会議長等の参加を得て，盛況のうちに全行事を滞りなく進行させることができた。

大会を終えて，１ヵ月にも満たないうちに，この効果を判断すること自体早計し過ぎるが，寄稿依頼に応えるため，大会に際して意図したこと及びその結果についての一端を述べてみたいと思う。

まず，冒頭に記した調査員に意欲を持たせる件であるが，調査員はこれまで，調査への協力を求められる説明会等の席で，『その性質上，目立たない陰の存在であるが，その功は大きく頑張ってもらいたい。』とか，『酬われることの少ない献身的な努力に頭が下がる。』という，それこそ，型通りのねぎらいの言葉を貰うだけで行政への協力を強いられてきた。しかし，調査員も人の子，これで満足するはずがなく，奉仕的精神で行政協力に努めている姿勢を理解してもらいたい，陽の当る地表にも出てみたいという意識にかられたことも多かろう。執行側の，これに対する具現措置が待たれていたわけである。大会についての感想を，ある調査員は次のように語っている。「大会の中に表彰を織込んでもらったことや，町長さん・県会議員の先生方から頂戴した心のこもった励ましの言葉にも増して，私にとっては，大会を持ってもらったこと，それ自体の意義が大きい」と。この言葉は，大会の結果を如実に物語るもので，予想だにしなかった大きな成果に満足している次第である。

次に，各種統計調査の対象となる町民・事業体への波及の点である。これまでは，調査への協力依頼という負担を強いての，いわば一方通行的接触でしかなかったものを，今回は，180度おもむきを換えて，統計の話題提供というソフトな形でのつながりを持ち，関心を呼び起こそうと意図した。これがどのような作用となって現われてくるかは，実査を待たなければならないが，確かな手応えとなって帰ってくることを期待し，調査時期がくるのをいまや遅しと待ちわびている。

近時，統計の利用促進が叫ばれているが，市町村における利用の実態は極めて遅れている状況にあると言わざるを得ない。この原因としては，統計担当者が調査のみに追われて，データの提供に追いつけないため，利用者との間に乖離が生じていることや，統計の正確性に対する強い不信感が持たれていること等が考えられる。しかし，私は，最も大きな原因は，人・機構を問わず行政体内部での統計に関する認識が薄い点にあると思っている。大会に意気あがる調査員の姿をみて，理解を深めてもらいたい，認識を新たにしてもらいたいと思うのは，担当者の勝手であろうか。

統計界は，いま，調査環境の悪化という“あらし„にさらされ，もがき苦しみ始めている。私は，これからの脱却のためには，生活感とのズレを感じさせない調査，つまり信頼される統計という非常に発達した“高気圧„を呼び込むほ

〔↖P14へつづく〕